「藪蛇」

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「藪蛇」

【Ｎコード】
Ｎ３０５５Ｆ

【作者名】
長根兆半

【あらすじ】
シャンピン・シャンピンピン・シャカシャンシャカシャカ・ピンシャカガム公、グミ助、チョコ坊の３人が繰り広げるコメディー小説。エー、わざわざと、お眼に止めていただき、誠に、有難うございます。

「藪蛇」

シャンピン・シャンピン
ピン・シャカシャン
シャカシャカ・ピンシャカ

エー、わざわざと、お眼に止めていただき、誠に、有難うございます。
桂馬の高飛び歩の餌食。なんてぇことを将棋の世界じゃ言いますが、平らに言いますてぇと、粗忽者てぇ事になりますか、慌て者の事のようで、気が効いていて間が抜けるってぇか、勇み足てぇか、ま、なかなか憎めないところがなんとも痛し痒しってなところがあります。

「よぉ元気な様子、何よりだ」
若い時のご無沙汰は、又、どっかで、バカやってんだろ。とか、何処、ほっつき歩いたんだか、なんて、どっか冗談っぽい響きで心配したりするもんですが、どうもこのぉ、年をとりますってぇと、なんですね
「病気したんじゃねぇか、ホームレスになっちまったんじゃねェか」
なんて、あんまし、いい方にいかない。しどい時には死んだか、なんて、ね。
まァ、よくよくかんげぇますと、そう思って貰いてぇって言う、こっちの思いが言ってる気もしますが、年を取るってぇのは、内の我無舎羅カカァでも、なんともならんくらいで、こりゃ仕方ございません。
こないだァ、久々にハンガリーから帰国した着流しの流れ板のガム

公。長屋の前で幼馴染のチョコ坊と待ち合わせていたら、あらガムちゃんじゃない、一寸、ガムちゃん、ガムちゃんでしょって、どっかで声がするから、ひょいと振り向くってぇとそこに見たこともないいいいトシマが、一人、羽織を軽くしっかけ、粋に着物を着こなして、ニコニコしている。

「ま、忘れたの、あ・た・し・・・チョコ坊よォ」なんていわれても、思い出せねぇでいるガム公首ぃしねってる。

「やだァ、お医者さんごっこしたでしょ」

なんていきなりでっかい声で言われ、辺り見ながら、面を真っ赤にしてる。

長屋の若ぇもんが横向いて、クスクスやってるんですから、決まりが悪りぃ。

でも、よく見るてぇと、どっか、料理屋の女将さん、って感じで、いい女の匂いが小鼻を突いてくる。あんまし、じろじろ見んのもはばかられるから、ツツーっと寄って行って

「本とかァ、あんな事デッケェ声で言われた日にゃ、思い出さなきゃ、馬鹿だろ俺ァ」

そしたらチョコ坊

「時間かかんのね」だってやがら。挙句に

「あの頃、何人とバカやってたんだか」なんて言われ、初手のかっこ悪ぃ気が、だんだんと嬉しくなっちまう。ガム公が

「それにしても、随分と長げぇ事、噂も聞かなかったなぁ」って言うと

「あれから、五年よもう、私、凧だから、糸離されると、どっかへいちゃう」なんて訳の判らん事を言うと

「最初に離したの、ガムちゃんよ」

「いつの事だい」

中学二年生の時だったとか。

立ち話もなんだからって、ボロ長屋の端っこの家に連れていくと、入るなり

「ワァ、ガムちゃんの家って、寝ながら星が見えんのねェ。なにやってんの今」ときた。
「何やってるったって、こっちは物心ついた時から板メーだ。バカも、アホもつまづきも、野原のかくれんぼじゃねェが、逃げも隠れもやってきた、女に溺れて投げた仕事は数知れない」って言ったら。
「今もか」
「そうだよ」
「どこで、何で、こんなボロ長屋か」って聞いてくるチョコ坊。
「日本の匂いが懐かしく、やっては来たが、行くとこがねぇ、ガキダチに頼んで十日ばかり借りたんだ。今は東欧ハンガリーだ」
チョコ坊の奴、外国と聞いただけで、聞くは語るは、茶も飲まず。
いつの間にかガム公も、玉置宏か三波春夫になって喋ってる。
夏と冬の差が激しく、その間に一寸だけ春と秋がある。長雨なんてこたぁねぇから、いつだって乾燥気味、暑くとも、このぉ、なんていうかな、さっぱりしてる。木だって花だって、小鳥だ蝶だっつうても、にっぽんと変わらねぇ。去年より、少し遅せぇけど、じき、初雪が来る頃だな。氷雨が枯れ木に貼り付いて、見る間に出来る樹氷の季節。
こないだから、EUにも入ぇッた。し行機の切符買ってくりゃ、な、何時でも遊すべる。
酒代ぇかかるが、ま、なんだぁ、ストリップは見放題、もっとも、場所にもよるが、その道、安心していいかな。食いモンは不味いが、時には旨い物もある。ワインかぁ、こらぁうめぇ。世界一だ。美女はモスクワ、ポーランドと並んでヨーロッパ三指にへぇるかな。
冬なんざ、ドナウの夜景が童話の世界だ。凍てつく油のような川面の流れに、川岸の灯が、こう映って、やわらけぇ霧がくる。ドナウの川に架かる鎖橋が、わぁっと電気に照らされ、寒くて震えながら、ドボンと温泉で温ったまる。そんな時ぁ、誰だっておそらく、あぁ、この世の極楽、って気になんだろ。人と生まれた嬉しさを頬に滲ませんだろ。なぁんて、ガム公がうっとり言ってんのに、チョコの奴ぁ

「いぃいって見たいなぁ、よその国ぃ」とか何とか、歌い出しちまうからいい気なもんです。
ガム公は、なんとなく寝た子を起こされたような気になっていったのですが、チョコ坊は気が付かない。トボケてガム公
「今何やってんだい」
そしたら、クリーニング屋のおかみ・・・だと。あは、どーりでこざっぱりして、いぃ匂いなわけだ。なぁんて、外国生活が長いガム公が、幼馴染のチョコ坊と破れ長屋の一間で、昔話に花をさかせ、チョコ坊が赤くなって、もじもじしてるとこに、いきなり飛び込んできたガキダチのグミ助ってぇ野暮が居ます。
「ガム兄ィ、よく眠れたかい」
「ほらきた、ケーマ」
「なんだい、そのケーマッての？」
「あぁ、何でもいい、えぇとこに来た」
「何がでぇ・・・？」
「チョコ坊、こいつがケーマ、じゃなくって、ガキダチのグミ助」
「よろしくケー、じゃなくってグミ助さん」
「なんだいなんだい、さっきからケーマだケーマだっつぅて、二人してぽぉっとしたりして、えれぇとこに、来ちまったかな」
「バカッ、余分な事いってんじゃなぇ。それよか、なんだ、あの、俺のカバンどこだ」
「何すんだい、もう、けぇるのか？」
「ンなこと、言ってやしねぇじゃねぇか、とにかく要るんだ」
「何を・・・？」
「だから、カバンだよ」
「なんでだい？」
「ン、その、なんだ、聞かれたが、忘れっちまったんだよ」
「なにを・・・？」
「うるせぇ奴だな、電話だよ、電話」
「アレに電話でも入ってんのか？」

「しつこいな、いいから早く持って来い」
「ははぁん兄ィ、ここに俺がいちゃぁ、なんかまずいんだ」
「ハッ飛ばすぞ、このヤロー、番号を知りてぇんだ、番号を」
「怒るなよ、番号って、電話のかい？」
「そうだ、ったく、しとに恥ぃかかせやがって、手間の掛かる奴だよ」
「なんだ、電話番号かい、で、誰の？」
「誰のって、俺のじゃねぇか」
「なんだい、それなら、三年前ぇから知ってらぃ」
「なんだ、その三年前ぇってのなぁ？」
「聞いてやってくだせぇ、御親造さん」
「御親造さんだってやがら、チョコ坊はクリーニング屋の女将だよ」
「ハイ、その女将さん・・・」
チョコ坊、どうしたのか、いきなり下向いて、モジモジして
「アラ、ね、ガムちゃん、どうしよ、あたい」
「あたいって、チョコ坊までなんだ、いったいどうしたんだ、いきなり」
「だって、御親造さんなんていわれちゃ・・・」
「御親造さんだったら、そうなんのかい？」
「御親造さんとなると、ほら、若いツバメかなんか、出来ちゃいそうで」
「なぁに言ってんだい」
「いいじゃないガムちゃん、あら、グミ助さん一寸へんよ、湿っぽくなっちゃってるじゃないか」と心配顔のチョコ坊が、レースのハンケチをグミ助に渡す。
グミ助はそれを顔に当てると、はぁはぁしながらそっくり返っていく。
ガム公がいきなり、何やってるんだから、って言うと、グミ助が、いい匂いだなんて言うもんですから、ガム公が
「先の話は、どうしたっ」てどやす。グスンとグミ助

「あれぁー三年前ぇの事。こっちで、いじめにいじめられ、いくとこなくなって、ガム兄ィを頼って、ロンドンに行った。銭も金も、チャリンと音のするものが俺には何もない。後で知った事だが、粋がってあすんでるが、兄ィにも仕事がない。そいでも俺に食わしてくれた。陰で見てたが、兄ィは絵を書いて、広場に行ってそれを売り、その金で俺に食わしてくれた。十日もした頃だったか、いきなり兄ィが、明日ハンガリーに行くって言うから、俺も行きてぇって言ったら、日本に帰れって、思いっ切り叱られた。せめて行き先を教えてくれと、ねだって聞いた電話の番号。忘れねぇよ。グスン。ついでに覚えてる携帯も」

「そんな古い話し出しやがって、照れくさくってケツがむずむずしてくらぁ、このバカヤロッ」「なにすんのガムちゃん、ブツ事ないじゃない。このしと、桂馬の金成りだよ」

「金成りか、よかったなグミ助、チョコ坊ありがとよ」

「過ぎた昔を洗い流して、惚れ直そうかしら、ガムちゃんに」

「さすがクリーニング屋、本とかい？」

「ガム兄ィよせよ、それだけは、イギリスの女将さん・・・どうする」

「ギャァー、とんだ藪蛇だった。手めぇは、やっぱり歩の餌食だ」

「ガム兄ィしとの事、いえんのかぁ」

どうやら、どっちもどっちのようで、又のお見届けを・・・。一服終わって、アラドッコイ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3055f/

「藪蛇」

2010年12月9日13時56分発行